

F 5 中学生の裁縫ミシンによる縫製作業について—電動ミシンと足踏みミシン使用の場合—
京都教育大 ○増田久子
帝国女子大 清水 歌

目的 演者らはさきに、小学生を対象として、電動ミシンと足踏みミシンを使用して、糸をつけずに直線縫いを行わせる調査を行い、その結果、小学校の家庭科では、電動ミシンを用いて学習させることが、児童のミシン使用能力の観点から適切であるという結論を得て、すでに報告した(1979)。中学校においては、被服学習の教具として足踏みミシンを使用して指導し、学習成果をあげているところもあると聞く。そこで、今回はこの結論が中学生にも当てはめられるかどうかを検討するために、中学生を対象として、前回と同様に、電動ミシンと足踏みミシンを用いて、糸をつけずに直線縫いを行わせる調査を行い、作業の実態と作品の観点から分析を行ったので報告する。

方法 調査対象は京都教育大学附属桃山中学校の1年生男女総数123名、調査時期は昭和56年9月、作業は、白色キャラコ(35×45cm)を2つ折りにし、25cmの直線を3本引いたものを用い、ミシン針は16番、針目は3mmとして、糸をつけずに縫わせた。

結果 作業状態の主なものについては、足踏みミシンでは、縫い始めに逆回転せずスムーズに動き出せる者は約55%で小学生より多いが、手と足とのタイミングが合っている者(約25%)、縫い終りに速度を調節できる者(約27%)は少ない。電動ミシンでは、コントロールのふみ方が、縫い始めに調節できる者は約53%、縫い終りに調節できる者は約21%である。作品については、縦・横ともに遅脱のないものは、電動ミシンでは約33%、足踏みミシンでは約23%であり、有意差はみられない。なお、ほとんどの項目について、男女差はあるとはいえない。